

同、申、荒木田武秀同守頭  
 同、秀頭同氏恭同春重同賢光  
 度會 晨久同秀行等叙齋

神宮御奏事目錄令奏聞令返進候也謹之

二月五日

宣胤

以中將及

一奏ノ下、掖、マ、付、傳、奏、名、事

永正五年二月五日 | 奏 中御門大納言

一 二牧ヲ寫給、事、一牧を進、禁裏、一牧を置、松 以、御、門、大、納、言、ト、申、上、リ、テ、傳、奏、名、ト、申、上、リ、

一 仰、詞、付、ハ、ハ、チ、ト、シ、メ、テ、ハ、ハ、チ、ト、シ、メ、テ、ハ、ハ、チ、ト、シ、メ、テ、

一 銘ハ奏事目錄メ、付、注、符、ハ、是、ト、奏、聞、ハ、後、ト、シ、

一 叙、爵、口、宣、察、八、通、可、為、各、別、祭、主、可、進、執、ハ、右、侍、用、意

ハ、宣、下、八、人、ヲ、為、一、紙、右、奈、ノ、内、注、遺、頭、中、將

神宮奏事目錄 三牧寫進入、ハ、以、内、宣、滅、恐、

二月五日 原親

中御門大納言殿

日付五字並仰詞不付、示、上、旨、返、遣、付、

六日奏事目六到、果、一、牧、進、禁、裏、

神宮の事

天明五年正月十一日奏事目錄  
 是ハ、裏、松、岡、禪、入、道、殿、ト、朋、友、春、木、集、人、煥、光、ト  
 一、所、也、煥、光、ハ、入、道、殿、ノ、外、孫、也

天明五年正月十一日 祀定 奏

神宮條々

祭主三位申 神領再興事

仰早可仰武家

同申 祈年祭幣使再興事

仰早可致其沙汰

同申 後四位上 荒木田守度神主

奏事目錄  
 永正五年二月五日 奏  
 中御門大納言  
 神宮御奏事  
 仰早可仰武家  
 同申 祈年祭幣使再興事  
 仰早可致其沙汰  
 同申 後四位上 荒木田守度神主

同盛居神主同高品神主同常會  
 神主同守兄神主等申正四位下  
 從五位下度會常美同幸誠同家  
 光同金森同永章等申從五位上  
 事  
 仰早可令 宣下

伊勢祠官と御禱師と稱す、事ハ東鑑ニ見之、

○東鑑 永三年十二月三日 武衛右、御祈願之

間奉<sup>レ</sup>寄<sup>レ</sup>領<sup>所</sup>於<sup>レ</sup>豊受大神宮給<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>年來御禱師

被<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>權<sup>レ</sup>祢<sup>レ</sup>亘<sup>レ</sup>充<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>

御師<sup>ノ</sup>稱<sup>ス</sup>事<sup>ハ</sup>弘安元年公卿勅使記内宮延

德注進狀等<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>云々

○弘安元年公卿勅使記無風雨之難無為可遂

使節之由殊可祈請之旨可仰本宮御師并祭主

宮司

内宮延德注進狀<sup>細川殿</sup>

大神宮御師祭主職并内宮造宮使等任<sup>レ</sup>理運

之旨可為如先規之由為上意被<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>甘<sup>レ</sup>之上者

諸神領以下被知行<sup>レ</sup>弥可被<sup>レ</sup>抽<sup>レ</sup>御祈禱<sup>レ</sup>精誠<sup>レ</sup>候

於<sup>レ</sup>止祭主職職直輔直之一類者不可有許答

之由可被<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>下也仍執達如件

明應二年五月七日

信濃前司判 掃部頭判

御師岩出權大神<sup>左</sup>

又諸國<sup>ノ</sup>祈禱<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>采<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>且<sup>レ</sup>那<sup>ト</sup>稱<sup>ス</sup>事

○内宮年中行事正月十一日詔詞謹語再拜

云云又檀那ト稱スル人達ヲモ安穩泰平

恒幸給<sup>レ</sup>恐<sup>レ</sup>申<sup>○</sup>内宮年中行事も

久年中行事といへり云々

恒氏経卿の加筆あり云々

或問曰御師といふ事ハ源氏物語玉蔓巻

近々為ハ佛の右の方ニ近き間

師ハいまく深りらぬハ云々

師御持僧中可選其人事也堀河院御時唯識論

誦習御師永縁欲<sup>レ</sup>召<sup>レ</sup>巨房難<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>雖<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>猶<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>淨

行<sup>レ</sup>淨<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>御師之故歟と見えて佛家の名

目也且那ハ翻譯名義集<sup>ノ</sup>法界次第<sup>ノ</sup>をひきて

奈言布施若内有信心外有福田有財物三事和

合<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>捨<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>破<sup>レ</sup>慳<sup>レ</sup>貪<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>檀那と見え圓珠菴

契沖の万葉第十六の注も檀越ハ曰譯の梵

語新譯ハ檀那也此ハ布施といふこと

是又いみ<sup>キ</sup>佛語也大神宮ハ佛をいまる

事朝家の憲法にて正史實録に昭々歴

り云々小祠官の輩利<sup>ト</sup>奔<sup>レ</sup>尊考の意より

うやうの佛語をぬす用う事數く堪と  
 事ありすや平答て曰大神宮はかいてハ  
 甚しく佛をいいて神事の時の忌詞も佛と  
 中子又立強経を深紙塔を阿良い伎寺を瓦菅  
 僧と髪長尼を女髪長と稱する事也あう  
 御師且那等の佛語を用うことハ誠ニ恥  
 べきことのみきうなりありまはし是又中世  
 の一例也源氏物語早嚴卷阿闍梨の消息ハ嚴  
 つくく一の事と是ハ童の供養して侍る初穂  
 也とあり初穂といふくハ神々のつふ詞

百部内書等  
 此は神事  
 神事ハ  
 神事ハ

ちくくハ論なり佛をく物を初  
 穂といつ中世神は用う詞を佛のつい佛  
 は用う詞を神もつい一例あり也又  
 且那とハ殿上人天子をくても且  
 那と称するあり書を見えついつの程  
 り世間一同上下貴賤は通す俗言とな  
 りこれハ今もてハあなうら佛語とのい  
 いさうさへき也  
 又祠官の家と坊といふハ宿坊の意なり  
 ○是をも佛家の名目也とありハむ言也

坊といふ種の義あり一ハ皇太子の御  
 宮を春宮坊といふ春宮大夫亮大少進大少属  
 と坊官といふ東宮職負令職原抄に見え  
 二ハハ女の樂をちりふ所を内教坊といふ大  
 中納言の人を別當に補すも職原抄に見  
 え三ハハ京都の町割の法は町保坊とい  
 ふ事あり家八軒なりを一行といふ是  
 を四合せらるを町といふ三十二軒也町を四  
 合せを保といふ百三十八軒也保を四合  
 せを坊といふ五百五十二軒也坊を四合

せを條といふ二百八軒なり一條二條三條なり  
 ハ此割方也拾芥抄制度通本朝官制沿革圖考に見え  
 四ハハ一條より九條まで皆坊名あり一條を桃花坊  
 二條を銅駝坊東三條を教業坊西三條を鏡財坊東四條を  
 永昌坊西四條を永寧坊東五條を宣風坊西五條を宣義坊  
 東六條を淳風坊西六條を光徳坊東七條を安寧坊西七條を  
 疏駝坊東八條を崇仁坊西八條を延嘉坊東九條を陶  
 他坊西九條を開建坊といふ拾芥抄制度通本  
 朝官制沿革圖考に見え五ハハ宿所を坊  
 といふ神宮雜例集年中行事五月晦日條宿坊

を忌殿と號すとあり是離宮院の勅使の止宿所といふ大神宮雜事記淳和天皇天長六年九月條勅使中臣定實、離宮、宿坊是も勅使の止宿所也又同書後冷泉院永承六年九月條目代範經又參入中臣坊とありハ離宮院勅使の止宿所也又同書治曆四年條祭主御坊參入之人々とあり此祭主の御坊も離宮院の祭主の御止宿所也内宮年中行事六月十七日條柳祭使并官司等、徒坊、九丈殿也とあり是ハ勅使官司等の從者の止宿所九丈殿なり也參

宮人御師の宅を坊といふも止宿所也以上皆佛家の名目ありて、明證なり  
まゝ、いつの程より、祠官を大夫と稱す  
○大夫ハ和各抄ハ四位五位を大夫の位階とあり京家にて諸大夫といふも四位五位の人也堂上の御息叙爵のいふして無官といふも大夫殿と稱す平敦盛と無官の大夫といふも此大夫殿也中務式部民部ハ官属卿大輔少輔大丞少丞大録少録左近衛右近衛ハ官属大將中將少將將監將曹左衛門右衛門ハ官属督位

大尉少尉大志少志といふも大夫といふことなり、太平記ハ相摸入道の舍弟北條左近大夫近世にてハ福嶋左衛門大夫あり、是も左近將監左衛門尉の叙爵なり、をいふ中務丞相當正式部丞民部丞相當正左近衛將監相當從左右衛門尉相當從下等も官ハ其係にて五位叙す時ハ他も敬にて中務大夫式部大夫民部大夫左近大夫右近大夫左衛門大夫右衛門大夫と稱す是を叙留判官といひて規模とす事也伊勢の祠官を大夫

と稱すも此類の尊稱也近來能役者歌舞妓從者遊女をも大夫と稱すも混して、いふも稱也とありハ、いふも事也  
初穂といふハもと秋実のいふも、稲の始ての穂をいふて神に奉りて出た、稱なれとも今もてハ金錢にてもす一て大神宮に奉り物ハ皆初穂と稱す  
○初穂の事延喜式第八卷祈年祭祝詞回祭水分、神祝詞廣瀬大忌神祝詞倭國六、御縣山口坐神祝詞龍田風神祭祝詞六月十二月月次祭水

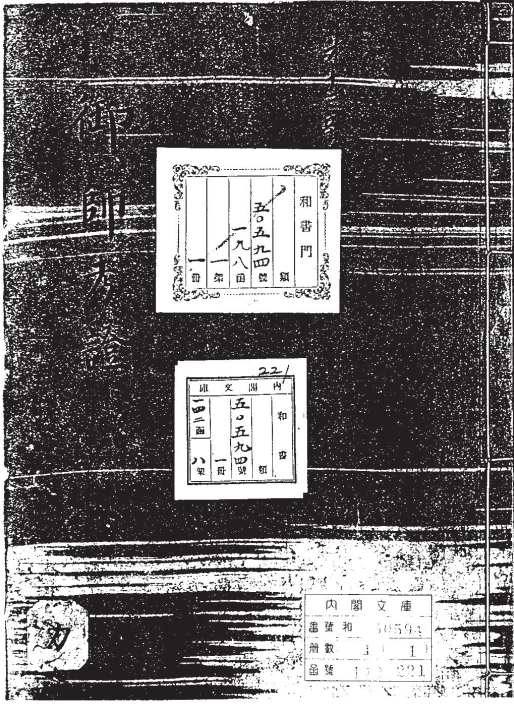
合神祝詞より倭姫世記に拾一本十穂八百穂  
 茂礼里竹連吉比古等仰給先穂拔穂令拔な  
 ありハその年の秋の初めの穂を神に奉る  
 を三代實録貞觀十二年十一月十七日告  
 文天皇我詔音宗像神乃前申賜倍申  
 鑄錢所近久須仍所鑄作之早穂二十文  
 令捧持奉出賜とありハ一轉して錢を早  
 穂といつ今諸國より奉宮の人民の奉る金  
 錢を初穂といふハ此意也源氏物語早嚴卷阿  
 闍梨の許より嚴つくくを中君に奉れ

消息は是ハわらうの供養して侍るもの  
 ほなりとあり是ハ又一轉して佛の供物をこ  
 つほい源氏物語を作り物なりとしり  
 やりの事ハ其世の實とをいハ證とす  
 へき也字のりきやも延喜式祝詞ハ初穂  
 倭姫世記ハ先穂三代實録ハ早穂とす  
 又殊な祈願ある人の大に神樂大神樂なると  
 奏す事是より例あり玉海養和元年  
 十月二日余頼朝卿義仲朝臣等の安礼より

後白河法皇大神宮に行幸ありつきや又大神  
 宮にいて御神樂を行なへきや計らい奏す  
 一と院宣あり事東鑑嘉禎元年十二月廿四日  
 將軍頼経御庖瘡の御不倒より御祈のを文  
 伊勢内外宮其外諸社にいて御神樂を修す  
 き仰下さる事寶治二年十二月五日將軍  
 頼朝卿殊なく御願より清左衛門尉満定奉  
 行して大神宮に御神樂を寄進し事見え  
 たり又祠官より祈禱をよむ人より万度被十度  
 被を贈り事よりつき事也一祢宜氏経卿日記に

寛正三年九月杣上分の事より伊勢國司北畠  
 殿の支族坂井殿へ十度御被大麻と進す事應  
 仁二年九月九日將軍義政公の若君御歡樂より  
 りて一万度御被大麻十度御被大麻を進上す  
 事内宮引付文明元年十二月小社御厨の事より  
 きて小社政所へ十度御被大麻と贈り事文明二  
 年九月三日上野國讚岐庄の事より地頭赤井  
 氏へ十度御被大麻とかくり事文明二年十月二  
 日安樂御厨の事よりつき關豊前守へ十度御被大  
 麻を贈り事外宮祢宜辰彦引付天文九年六月





外宮造替の事につき織田弾正忠信秀朝臣一  
 万度御被大麻を進す事見えり

御師考證

一冊

右を返ると事々精細被考証  
 と感人の宣胤記に今比校し  
 と下押寄、注角入の宣胤  
 持う給ふ

九月十日

光椽

足代権大夫殿